
研究報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂大学保健看護研究 6
P.34-41 (2018)

小児看護実習におけるペア実習に対する学生の評価

Students' evaluation for Pair Practice in Child Health Nursing

林 亮¹⁾ 齊藤 麻子¹⁾ 石井 くみ子¹⁾
 HAYASHI Ryo SAITO Asako ISHII Kumiko
 川口 千鶴¹⁾ 西田 みゆき²⁾
 KAWAGUCHI Chizuru MIYUKI Nishida

要 旨

学生がペアで子どもを受け持ち実習することに対する学生の評価をメリットとデメリットから明らかにすることを目的として、小児看護実習にてペア実習を行った看護大学4年生を対象にインタビュー調査を行った。その結果、実習のメリットとして【学習に対するモチベーションの向上】【ケアの質の向上】【より正確な他者への情報伝達】【協力体制など他学生への刺激】等、8 カテゴリー、ペア実習のデメリットとして【ペアと比較されることによるプレッシャー】【実習経験減少への懸念】【方針のすりあわせによる疲労】等、6 カテゴリー、教員に求める配慮として【学びの機会が同程度になるような配慮】【ペア実習に関する情報の開示】【情報共有・行動調整の時間確保】【学生個々の主体性を引き出す配慮】の4 カテゴリーが抽出された。教員及び実習指導者がペアのダイナミクスの形成や精神的負担感を軽減、各々の学生に対する偏りのない指導、情報交換や行動調整の時間調整への援助に配慮することで、単独での実習に比べて遜色のない、もしくはそれ以上の効果が期待でき、さらには、ペア以外の学生にも良い効果が期待出来ると学生自身が評価していることが示された。

索引用語：ペア実習、小児看護学、看護学生

Key words : pair practice, child health nursing, nursing student

1. 背景

小児医療の発展による入院期間の短縮化や少子化等により、小児科を有する一般病院は1990年の4,119件から2015年の2,642件、一般診療所は1990年の27,747件から2014年の20,872件と減少の一途を辿っている¹⁾。加えて、看護師養成校は平成19年度

で1,659校であったものが平成28年度では1,793校、総定員数もそれに準じて約22.7万人から約27.5万人と急激な増加を遂げている。このような状況の中で小児看護実習を取り巻く環境は、全国的に小児看護実習の受け入れ施設(病院)を確保することが困難となり、学生が入院している子どもの看護を学ぶ場が少なくなっている。本学においても、小児看護学実習においては学生が1人で1名の患児を受け持つことを前提としていたが、実習病院によっては実習対象患児の確保

1) 順天堂大学保健看護学部

2) 順天堂大学医療看護学部

1) *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

2) *Juntendo University Faculty of Health Care and Nursing*

(Nov. 10, 2017 原稿受付) (Jan. 19, 2018 原稿受領)

が困難を極め、入院中の患児1名を2人の学生で担当すること(以降、ペア実習)もしばしば起こっていた。ペアで行う実習を導入するにあたり、ペア学生間における学力やコミュニケーション能力の差、ペア学生間及び学生と教員・臨床指導者間の関係性が学生の学びや実習に対する姿勢に影響を与えているのではないかと考えた。

近年、2人の看護師が安全で質の高い看護を提供することを目的に、良きパートナーとして対等な立場で互いの特性を生かし、相互に補完しあって、毎日の看護ケアを始め委員会活動・病棟内係の仕事に至るまで1年を通じて活動し、その成果と責任を共有する看護体制である、パートナーシップ・ナーシング・システム(PNS)が盛んに行われている。PNSの効果として、心身が楽になる、コミュニケーションが増す、能力開発につながるなどが示されている²⁾。ペア実習は、一人の患児を中心とした看護実践における成果と責任を学生ペアが共有する点でPNSと共通する。すなわち、学生同士が対等な立場で互いの特性を生かすことで、子どもとのコミュニケーションに困難を感じる学生や緊張の強い学生にとって、学習効果があるのではないかと考えられる。学生がペアで実習を行うことに関しては、実習満足度と学生ペアの人間関係は正の相関関係にあるとの報告がある³⁾。しかし、学生がペアで実習することについて、どのようなメリットやデメリットを認識し、評価しているかについての詳細は明らかになっていない。

II. 研究目的

ペアで子どもを受け持ち実習することに対する学生の評価をメリット・デメリットから明らかにする。

III. 研究方法

1. データ収集期間

データ収集期間：平成28年11月～平成29年1月

2. 対象

看護大学4年生のうち、①4年次前期(平成28年5月～7月)に小児看護実習を行った学生、②受持ちとしてペアで患児をケアした学生(ペアでの受持ち日数は問わない)、③研究協力に同意が得られた学生、以上の条件を満たす学生5名を対象とした。なお、本学では3年次後期から4年次前期にかけて臨地実習を行っている。

3. リクルートの方法

対象となりうる学生28名にE-mailにて研究協力の依頼文書を送付し、研究についての説明を聞く意思のある学生を募集した。応募した学生に対し研究の主旨等を口頭と書面で再度説明した後に同意を得た。なお、リクルートは当該領域以外の研究者が行った。

4. データ収集方法

施設内のプライバシーが保てる場所で半構成的インタビューによりデータ収集を行い、逐語録をデータとした。インタビューは、ペアで実習すると聞いた時の気持ち、ペアで実習することによる実習への影響、実習後の感想などを中心にインタビューガイドを用いて行った。インタビューは当該領域以外の研究者が行った。なお、インタビュー時間は平均49.9±9.8分であった。

5. 分析方法

逐語録を精読し、学生の語りからペアで実習することの学生の評価に関連する部分を抜き出し、文脈を損なわないようにコード化し、「ペア実習のメリット」「ペア実習のデメリット」「教員に求める配慮」の視点で分類した。その後、コードの類似性、相違性を考慮してカテゴリーを生成した。

IV. 倫理的配慮

本研究を遂行するに当たり、以下の倫理的配慮を行った。① 研究の依頼およびインタビューは当該領域以外の研究者が行うことにより、強制力を排除した。② 研究参加への自由意志であること、本調査は小児看護実習の成績が確定した後に行うため研究協力の可否が成績に影響しないこと、分析前までは撤回可能であること、個人情報保護、研究結果の公表について文書を用いて口頭で説明した後に書面で同意を得た。③ 身体的不利益への配慮として、学校行事などで対象者の疲労が強い時のインタビューは避けた。

なお、本学部の研究等倫理委員会による倫理審査を受審し、承認を得てから実施した。

V. 結果

対象者の属性は、女子学生が4名、男子学生が1名であった。本研究における文中の表記方法は、カテゴリーを【 】、コードを〈 〉とした。以下、「ペア実習のメリット」「ペア実習のデメリット」「教員に求める配慮」における各カテゴリーについて述べる。

1. ペア実習のメリット

ペア実習のメリットとして8のカテゴリーが抽出された(表1)。

【学習に対するモチベーションの向上】は、〈相手の良いところを参考にしてモチベーションを上げる〉や〈ペアの学習状況を確認して励みにする〉のように、ペアとの切磋琢磨の中でのモチベーションの向上と、〈相手に迷惑をかけないように予習する〉のように、ペアに対しての責任感を学習への動機付けとしているケースがあった。

【ケアの質の向上】は、〈作業を分担できるためケアに広がりが出る〉〈深い振り返りが行えケアに活かせる〉のようにペアで協力することによってケアの質が高まることを実感していたことを意味する。

【患児と家族の個々に集中した関わり】は、〈同じ場面で患児と母親それぞれを分担して関わるができる〉のように、1人で1人の患児を受け持つ場合は1場面において母親のどちらかに集中しがちなところが、2人いることにより母親の両方に注意を向けることにつながっていたことを意味する。

【作業を分担することによる負担の軽減】は、〈ケアの準備や実施の負担が半分になる〉〈状況に合わせて役割分担することで互いのできないことを補う〉のように、ケアの準備や実施の段階で役割分担をすることでケアがスムーズに進み、学生の物理的な負担が減ることを意味する。

【相談できることによる精神的負担の軽減】は、〈同じ状況を体験するため支え合っている感覚がある〉のように同じ状況を体験し相談しあえることによる連帯感や〈ペア同士で相談できるため精神的負担が減る〉のように知識や技術面において互いに助け合うこと、フォローしあえる状況であることから、精神的負担が減ることを意味する。

【情報量や気づきの増加による深い対象理解】は、〈ケアの中で患児や家族が表現したことをフォローの学生は気がつきやすい〉のように片方の学生がイニシアティブを発揮して行動している時に、フォローに回った学生は状況を俯瞰的に見ることができること、〈違う視点から捉えた患者像について意見交換するため考えがすっきりする〉のように情報収集の分担や疾患や治療、患児の個別性に関する学生同士の学習内容を共有することにより、対象理解を深めていたことを意味する。

【より正確な他者への情報伝達】は、〈情報を補い合うことで指導者への報告で正確に情報を伝えることができる〉や〈互いに補完しあえるため自信を持って意見を言いやすい〉のように、ケースカンファレンスや実習指導者、教員に対する情報伝達の際に、互いにフォローしあうことで、抜け落ちてしまった情報や別の視

表1 カテゴリー一覧

	カテゴリー	コード(例)
ペア実習の メリット	【学習に対する モチベーションの向上】	〈相手の良いところを参考にしてモチベーションを上げる〉
		〈ペアの学習状況を確認して励みにする〉
	【ケアの質の向上】	〈相手に迷惑をかけないように予習する〉
		〈ペアの記録と比較されることを想定して課題に取り組む〉
		〈作業を分担できるためケアに広がりが出る〉
		〈深い振り返りが行えケアに活かせる〉
	【患児と家族の個々に集中した 関わり】	〈お互いに患児や母親との関わりから新たな視点を学ぶ〉
		〈ペア学生の介入を見ることで、自らの介入を見直すきっかけとなる〉
	【作業を分担することによる 負担の軽減】	〈同じ場面で患児と母親それぞれを分担して関わるができる〉
		〈ケアの準備や実施の負担が半分になる〉
【相談できることによる精神的な 負担の軽減】	〈状況に合わせて役割分担することで互いのできないことを補う〉	
	〈同じ状況を体験するため支え合っている感覚がある〉	
【情報量や気づきの増加による 深い対象理解】	〈ペア同士で相談できるため精神的な負担が減る〉	
	〈ケアの中で患児や家族が表現したことをフォローの学生は気がつきやすい〉	
	〈教員や指導者に自分の聞けなかった疑問を表出してもらえる〉	
	〈違う視点から捉えた患者像について意見交換するため考えがすっきりする〉	
【より正確な他者への情報伝達】	〈必要な情報を二人で分担して集めることができる〉	
	〈情報を補い合うことで指導者への報告で正確に情報を伝えることができる〉	
【協力体制など他学生への刺激】	〈情報量が多いため他の学生も患児をイメージしやすい〉	
	〈互いに補完しあえるため自信を持って意見を言いやすい〉	
ペア実習の デメリット	【情報共有に伴う困難】	〈ペアの学生が協力している姿を見て他の学生も協力する姿が増える〉
		〈分担した情報収集では期待した情報を得られない〉
	【ペアと比較されるプレッシャー】	〈ライフスタイルが異なるため実習時間外で情報共有の時間の確保が難しい〉
		〈実習開始時の行動計画発表でずれが生じる〉
	【患児への圧迫感の懸念】	〈比較されているのではないかと気になる〉
		〈ペアとの成果物の差が気になる〉
	【実習経験減少の懸念】	〈ペアの学習状況が見えることで自分が劣っている部分が気になる〉
		〈スペースが限られているため2人で病室に入ることをためらう〉
	【方針のすりあわせによる疲労】	〈患児と関わる機会が少なくなるのではないかと感じる〉
		〈教員からの指導時間は2人で1人分という感覚がある〉
〈自分のこだわりを發揮しにくい〉		
〈自分の慣れた方法でケアを実施しにくい〉		
【突発的な状況での 意思疎通が困難】	〈ケアの方法やタイミングをあわせるのに気を使う〉	
	〈実習に対する熱意がちがうとギクシャクする〉	
【学びの機会が 同程度になるような配慮】	〈ペアの意向に合わせられずに申し訳なく思う〉	
	〈ケア時に役割分担を決めておかないと息が合わず混乱する〉	
【ペア実習に関する情報の開示】	〈突発的なことに対して臨機応変に決定することが難しい〉	
	〈即時の決定を求められる場面で話し合いにもたつきタイミングを逃す〉	
教員に求める 配慮	【情報共有・行動調整の時間確保】	〈学びの機会が同程度になるように配慮してもらえた〉
		〈重要なポイントは経験できるようにサポートしてもらえた〉
【学生個々の 主体性を引き出す配慮】	〈ペアと折り合いがつかない場合に教員に相談して納得を得る〉	
	〈ペアの決定の際にメリットとデメリットを教えて欲しい〉	
	〈前もってペア実習となる可能性を知っていると心構えができる〉	
	〈情報共有の時間が欲しい〉	
【学生個々の 主体性を引き出す配慮】	〈どのケアをどちらが主体でやるかの調整の時間が欲しい〉	
	〈教員からペアで相談し学びを深めるための働きかけがあった〉	
【学生個々の 主体性を引き出す配慮】	〈自分だけのこだわりの部分は教員と個別で相談する機会が欲しい〉	
	〈ペアを組んだ2人がイニシアティブを取れないと相乗効果を得にくい〉	
【学生個々の 主体性を引き出す配慮】	〈ペアの決定は学生の主体性を重視することでペアの関係性に良い影響を与える〉	

点での見解を提示することで、より正確な情報を伝達できることを意味する。

【協力体制など他学生への刺激】は、〈ペアの学生が協力している姿を見て他の学生も協力する姿が増える〉のように、ペアの学生が協力しながら学んでいる場面を見ることで、他の学生もケアを補助しあったり他学生の受け持ち児と積極的に関わってみたりと、ペア以外の学生に行動上の変化が現れたことを意味する。

2. ペア実習のデメリット

ペア実習のデメリットとして6のカテゴリーが抽出された(表1)。

【情報共有に伴う困難】は、〈分担した情報収集では期待した情報を得られない〉のように、情報収集を分担して行った場合に相手の担当した範囲の情報で不足することや、〈ライフスタイルが異なるため実習時間外で情報共有の時間の確保が難しい〉のように、集めてきた情報を共有する時間が不足すること等に対し、困難を感じることを意味する。

【ペアと比較されるプレッシャー】は、〈比較されているのではないかと気になる〉のように、同じ患児を受け持っているため、アセスメント内容や記録量、患児や家族との関わり方に関する差が明確になりやすいことから成績への反映を気にしたり、〈ペアの学習状況が見えることで自分が劣っている部分が気になる〉のように、ペアの学生の学習状況や患児との関わり、技術的な側面で劣等感を感じることを意味する。

【患児への圧迫感の懸念】は、〈スペースが限られているため2人で病室に入ることをためらう〉のように、特に患児が大部屋に入院している場合、限られたスペースの中に患児とその家族に加え、学生2名、時には教員や実習指導者が入ることになる。そのため、患児や家族に圧迫感を与えるのではないかと懸念したり、2人同時の入室をためらったりすることを意味する。

【実習経験減少の懸念】は、〈患児と関わる機会が少

なくなるのではないかと感じる〉のように、バイタルサイン測定や日常生活援助等を行うタイミングが限られている中で、2人で分担した場合、個々の経験が減る可能性を懸念することや、〈教員からの指導時間は2人で1人分という感覚がある〉のように、指導をペアでまとめられ、個々の学習内容への影響を懸念することを意味する。

【方針のすりあわせによる疲労】は、〈自分のこだわりを発揮しにくい〉〈ペアの意向に合わせられずに申し訳なく思う〉〈自分の慣れた方法でケアを実施しにくい〉のように、ケアの方向性や方法が異なる場合、調整に時間がかかる、ペアに対して申し訳なく思う、もしくは気を使うことを意味する。

【突発的な状況での意思疎通が困難】は、〈ケア時に役割分担を決めておかないと息が合わず混乱する〉のようにケア時に役割分担を明確にしなかった場合や、〈即時の決定を求められる場面で話し合いにもたつきタイミングを逃す〉のように予期していなかった状況が発生した場合、話し合いがまとまらずにタイミングを逃したり混乱したりすることを意味する。

3. 教員に求める配慮

教員に求める配慮として4のカテゴリーが抽出された(表1)。

【学びの機会が同程度になるような配慮】は、〈学びの機会が同程度になるように配慮してもらえた〉〈重要なポイントは経験できるようにサポートしてもらえた〉のように、実習指導者や教員からの直接的な指導場面や学生個々に向けられる時間の減少、限られたケア場面による経験の減少を懸念し、配慮を求めていることを意味する。また、〈ペアと折り合いがつかない場合に教員に相談して納得を得る〉のように、2人同時に行う面談以外にも、ペア学生に気を使わなくて済む個別面談も希望していた。

【事前のペア実習に関する情報の開示】は、〈前もっ

てペア実習となる可能性を知っていると心構えができる)〈ペアの決定の際にメリットとデメリットを教えて欲しい〉のように、実習開始時、ペアの決定を学生の主体性に委ねる場合、ペア実習のメリットとデメリットを知ることにより、心構えや話し合いのきっかけとなるため、情報の開示を希望することを意味する。

【情報共有・行動調整の時間確保】は、〈情報共有の時間が欲しい〉〈どのケアをどちらが主体でやるかの調整の時間が欲しい〉が含まれる。ペア実習のデメリットでも示されたように、ライフスタイルの違いから実習時間外は情報共有や行動調整の時間を確保することが困難な場合があるため、実習時間内に意図的に情報共有および行動調整の時間の確保を希望していた。特に実習開始時の行動調整場面で時間が必要なことが多く、時間確保の必要性を訴えていた。

【学生個々の主体性を引き出す配慮】は、〈自分だけのこだわりの部分は教員と個別で相談する機会が欲しい〉〈教員からペアで相談し学びを深めるための働きかけがあって良かった〉のように、学生同士で相談しながら学習するために学生個々の主体性を引き出す配慮を希望していた。

VI. 考 察

学生の感じるメリットとして【学習に対するモチベーションの向上】【ケアの質の向上】【より正確な他者への情報伝達】【協力体制など他学生への刺激】等が抽出され、ペア実習は単独での実習に比べて遜色のない、もしくはそれ以上の効果が期待でき、さらにはペア以外への学生にも良い効果が期待出来ると学生自身が評価していることが示された。その一方でデメリットである【ペアと比較されることによるプレッシャー】【実習経験減少への懸念】【方針のすりあわせによる疲労】等から、ペアの関係性や実習環境の調整についての課題が示されたため、以下で考察する。

1. ペアの関係性のフォロー

学生はペア実習のメリットとして、ペア同士の意見をぶつけ合い、相談し、協働することによって【情報量や気づきの増加による深い対象理解】【ケアの質の向上】【作業を分担することによる負担の減少】【相談できることによる精神的負担減少】【患児と家族の個々に集中した関わり】を感じていた。一方、協働がうまくいかない場合、【方針のすりあわせによる疲労】を感じていた。また、デメリットとして語られた【突発的な状況での意思疎通が困難】は、特に日常生活援助の場面で語られていた。ペア同士が積極的にイニシアティブを発揮するタイプでなかった場合、想定外な状況が起こった際にペアとしての考えがまとまらずに対応が遅れていたと考えられる。坂本は、協働学習の成立には、多様で異質な学習者が、お互いの能力やスキル、地域や文化的な資源を共有し、対等なパートナーシップと信頼関係を構築することで、同質的な組織内学習ではとうてい不可能な高い学習目標や達成が可能になるとしている⁴⁾。教員に求める配慮の【学生個々の主体性を引き出す配慮】にも表れているように、学生自身もこのことは認識しつつも調整に困難を感じていることが推測される。以上を踏まえ、学生個々の考えを引き出しペア同士の納得を促すこと、場面ごとにどちらの学生が主導的に行うのか前もった決定を促すこと、様々な状況を想定した対応案の検討を促すことが重要であると考えられる。

学生は【学習に対するモチベーションの上昇】を感じる一方で、【ペアと比較されるプレッシャー】を感じていた。町は、社会的偏見や学級内での評価といった地位特性による相互作用の質を低下させる要因に対して、教師が低地位の生徒の参加の価値について述べたり、課題解決に要する多様な能力について述べたりすることで、低地位の生徒の参加を促し高・低地位生徒の参加率の間のギャップが少なくなる可能性を指摘している⁵⁾。【ペアと比較されるプレッシャー】は、

ペアに対する地位特性に対する自己評価から感じるものと捉えることができる。【学習に対するモチベーションの向上】は、ペアに迷惑をかけたくない、学習成果として劣りたくないという思いも包含していたことを踏まえると、学生の視点の長所を引き出し学生自身の認識を促すことで、自己効力感を高めるような工夫が必要である。

2. 実習環境の調整

本学では、小児看護実習の期間は全体で2週間であり、振り返り、まとめを含めて保育園・幼稚園および障害児・者施設での実習を1週間、小児病棟での実習を1週間行っている。病棟実習にはオリエンテーションや外来実習、ケースカンファレンスをそれぞれ半日程度含むため、患児と関われる日数は実質3～4日程度と短期間である。学生は、患児に必要な日常生活援助がや関わることのできる時間がある程度限られていることから【実習経験減少を懸念】し、【学びの機会が同程度になるような配慮】を求めている。近年、全国の小児病棟では、疾患の複雑化や重症化により長期の入院を余儀なくされる患児がいる一方で、外来治療や在宅療養への移行が進む疾患をもつ患児の入院はさらに短期化するという、両極端な状況が混在する⁶⁾と言われており、本学においても同様の状況である。自立度が高い患児は比較的必要とされる日常生活援助の機会が少なくなり、入院が長期化した患児の多くは、先天的な疾患を有する場合が多いため病態の変化や治療の変遷に注意が向き、それらを追うだけで実習が終わってしまう可能性がある⁶⁾。佐藤らは、重症心身障害児を対象とした実習の特徴として長い療養生活における情報量が膨大であるため、臨床指導者から情報を要約して提供する必要があるとしている⁷⁾。本研究においてもデメリットとして【情報共有に伴う困難】が、教員に求める配慮として【行動調整・情報共有の時間確保】が抽出されており、ペア実習では、情報収集を

2人で分担することができるが、その膨大な情報を共有することが極めて困難な状況がうかがえた。この点に十分に留意し、学生が情報共有・整理・統合するための時間を確保できるよう指導に当たる必要がある。

3. 研究の限界

今回対象となった学生は、3年次から半年以上同じグループでの実習を経験してきた学生であり、ある程度グループダイナミクスが形成された状態での実習となっていたこと、ペア実習に対して良いイメージを持った学生が集まった可能性があることから、対象者数が5名あるため一般化は難しい。今後は対象者を拡大しつつ、実習開始初期のグループダイナミクスの形成が未熟な段階での学生の認識も調査していく必要がある。

VII. 結 論

1. ペア実習のメリットとして【学習に対するモチベーションの向上】【ケアの質の向上】【患児と家族の個々に集中した関わり】【作業を分担することによる負担の軽減】【相談できることによる精神的な負担の軽減】【情報量や気づきの増加による深い対象理解】【より正確な他者への情報伝達】【協力体制など他学生への刺激】が示された。ペア実習のデメリットとして【情報共有に伴う困難】【ペアと比較されるプレッシャー】【患児への圧迫感の懸念】【実習経験減少の懸念】【方針のすりあわせによる疲労】【突発的な状況での意思疎通が困難】が示された。教員に求める配慮として【学びの機会が同程度になるような配慮】【ペア実習に関する情報の開示】【情報共有・行動調整の時間確保】【学生個々の主体性を引き出す配慮】が示された。
2. 教員及び実習指導者がペアのダイナミクスの形成や精神的負担感を軽減、各々の学生に対する偏りのない指導、情報交換や行動調整の時間調整への

援助に配慮することで、単独での実習に比べて遜色のない、もしくはそれ以上の効果が期待できる。さらに、ペア以外への学生にも良い効果が期待出来ると学生自身が評価していることが示された。

引用文献

- 1) 厚生労働省, 平成27年度(2015)医療施設(動態)調査・病院報告の概況, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/15/dl/gaikyo.pdf>, 2016.
- 2) 三輪峰子, 川尻麻佑子, 安井裕美子, 野中真由美, 河村仁美: パートナーシップ・ナーシング・システム導入による成果と成果に影響する要因分析, 第45回日本看護学会論文集 看護管理, 19-22, 2015.
- 3) 平山綾蘭, 市川英加, 長田貴子, 押領司民: ペア実習の人間関係と実習満足度のとの関係, 第42回日本看護学会論文集 看護教育, 46-48, 2012.
- 4) 坂本旬: 「協働学習」とは何か, 生涯学習とキャリアデザイン, 5, 49-57, 2008.
- 5) 町岳, 中谷素之: 協同学習における相互作用の規定因とその促進方略に関する研究の動向. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 60, 83-93, 2013.
- 6) 西田志穂: 子どもが減少するなか、今後の臨地実習にどう挑むのか, 看護学雑誌, 71(5), 434-438, 2007.
- 7) 佐藤寿哲, 藤本美穂, 西順子, 黄波戸航, 吉川彰二: 小児看護学実習における重症心身障害児施設での学生の学び-コミュニケーションと小児看護学特有の学びに着目して-. 大阪青山大学看護学ジャーナル, 創刊号, 27-35, 2017.